

日本環境教育学会「原発事故後の福島を考える」プロジェクト 第2次調査

報告書

1) 日 時：2016年12月3日（土）～5日（月）

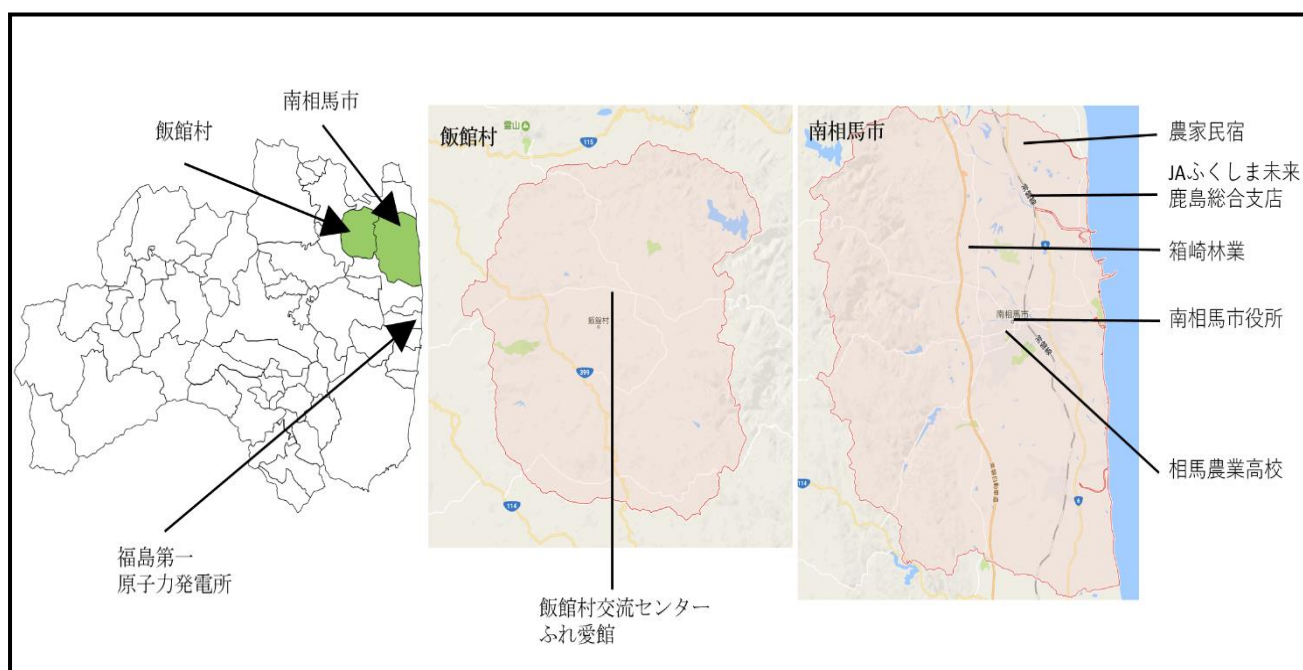
2) 場 所：福島県南相馬市、福島県相馬郡飯館村

3) 参加者：10名

4) 概 要

本調査は、毎年2回の頻度で最低5年間継続するとして福島訪問調査の第2次調査であり、3日間の日程で行った。第1次調査に引き続き、震災以降から本学会と縁の深い南相馬市を訪れた。1日目は、南相馬市役所にて南相馬市教育委員会を訪問した後、JA ふくしま未来鹿島総合支店において、JA ふくしま未来そうま支部所長ならびに課長にお話を伺った。2日目は、3軒の農家民宿(かざぐるま、翠の里、もりのふるさと)と、農家、箱崎林業を訪れ、聞き取り調査や意見交換を行った。3日目は、福島県立相馬農業高校において校長を始めとした教員にお話を伺った後、南相馬市役所において市長に表敬訪問を行った。最後に、飯館村交流センター(公民館)にて公民館長からお話をいただいた。

5) 訪問地 MAP



12月3日（土）1日目

13:30～ 南相馬市教育委員会（福島県南相馬市役所）

木村事浩之教育委員会事務局長に、南相馬市における学校現場の現状についてお話いただいた。小高区は来年の4月に小学校を再開するが、新1年生は少なく、今後の体制がどうなるか先が見えない状況であるようだ。人口復活のカンフル剤が必要だが、持続可能な開発と私たちの現実をどうすり合わせていけばいいのかわからないとのこと。

一方、鹿島区は仮設住宅が集まっている地域で、前年比で生徒が5%増えている。つまり、鹿島区、原ノ町区、小高区で人口のバランスが崩れている。生徒数が増える学校がある反面、減る学校があるという現状を鑑みて、学校の再編を考えていかなければならないという。現実を即して、少人数教育の効果を上げていく方法しか取れないのではないかと考え、今後1年以内に南相馬市の学校教育のあり方を検討しなければ、コミュニティの維持が難しくなるだろうと課題を述べられた。

15:00～17:00 JA ふくしま未来鹿島総合支店（福島県南相馬市鹿島区横手字川原 185-1）



聞き取りの様子



震災時の様子(スライド)

菊地さん（JA ふくしま未来 相馬地区総合支店 所長）、米津さん（JA ふくしま未来 相馬地区総合支店 課長）から、JA の取組、福島県内における農業の現状と課題等についてお話いただいた。JA ふくしま未来は、福島・伊達・安達・そうま地区のJA が2016年3月に合併し、誕生した。合併による波及効果に向けては、各地区の販売高の違いがある中で、今後の販売、加工等における連携が期待される。福島第一原発から20km圏外の農業は順調に再開される一方、県内は圃場整備が進むもののまだまだこれからであり、問題は担い手であるという。風評被害に関しても、他県における販売戦略のみならず、福島県内における消費が10ポイントほど減っており、地産地消などの県内における消費を震災前の水準まで取り戻さなければならないといった課題があるようだ。

また、福島県が震災前から取り組んできたオリジナル品種「天のつぶ」の作付けが2011年（H.23）から本格的に始まっており、現在は、特にそうま地区（浜通り）での収量の向上を目指していると伺った。

12月4日（日）2日目

9:00～ ① 農家民宿「かざぐるま」（福島県南相馬市鹿島区南柚木字相馬清水 308-6）

西沢さんから、福島に移住して民宿を始めた経緯や震災当時の経験、震災後の民宿の状況についてお話いただいた。栃木県から福島県に移住した理由として、海に近くて海釣りができること、耕作放棄地が日本一多いことが挙げられたそうである。当時、何軒も不動産屋を回り、不動産をいくつも見たが、その中には、もし買っていたら生きてなかったと思うと仰った。

震災時はパニックで、津波も想像を絶するもので、街は壊滅状態となり地獄かと思ったそうだ。避難から帰ってくると、がれきの片づけに追われると共に、機材やガソリン等の物資が何もなく、大変苦勞したという。周りでは、大声で泣き始める人や負債を抱えて自殺した人を目の当たりにして心苦しくもなった、と当時の様子を振り返る。

震災後には、炊き出し等のボランティア活動を行い、そこで仲良くなった農家民宿「もりのふるさと」の方に勧められて民宿を始めた。民宿を始めた頃は激動の時期だったが、多くの人に来てもらい、震災がなかったら民宿をやっていなかったとも考えているそうだ。

9:00～ ② 農家民宿「翠の里」（福島県南相馬市鹿島区南柚木字宮前 82）



小倉さんのお話



小倉さんを囲んで

小倉さんに、農家民泊を始めた経緯およびその現状と合わせて、震災体験をお話いただいた。田舎暮らしに憧れて、2005年11月に南相馬に移住した。住居には、以前の使用者のこだわりを尊重し、大切な部分は残していると伺った。2006年に農家レストランを始め、2009年には300人/年のお客さんが来るという。加えて、地域の感想を聞きながら料理のレパートリーを増やしていったそうだ。当時、1か月のうち10日は仕事、10日は畑、10日は勉強というスタイルをとっていたと振り返る。

震災以降、旦那さんの仕事がなくなり、趣味の料理が続けられなくなりサロンもできなかったが、2013年にサロンを再開したそうだ。震災を経験し、地域の人とのつながりが弱まってしまっている中、現在もサロンを粘り強く続け、地域の人と積極的にコミュニケーションをとっているという。サロンは弱者のためのものであるから、たとえ参加者が1人でも、ただお茶くみをするだけでも、サロンは必要であると考えられている。また、まだ仮設住宅が多い2013年頃には、東京農工大学が支援をしていた藍染と出会い、そのきれいさに心打たれたといい、サロンや藍染を通して、みんなが元気になって欲しいと思っているとのこと。

11:00～ 農家民宿「森のふるさと」(南相馬市鹿島区南柚木字宮前 50)



森さん夫婦のお話



集合写真

森さん夫妻に、主に農家民宿を始めた経緯や震災後の農業の状況についてお話いただいた。もともと都市農村研究会というグループに所属していて、その中で、都会から人を呼ぶためには農家民宿が必要だという話が出た。その後、実際の農家民宿を訪れて、自分でもできると感じたようだ。そのような経緯を経て、2010年から農家民宿を始められた。震災前はあまり知られていなかったためにお客さんは少なかったが、次第に口コミ等で少しずつ増えていったという。震災以降は、ボランティア活動や視察に来た人の宿泊場所がない状況の中で、幾人かは泊まってくれたようだ。

個人でここ30年ほど有機野菜の栽培をやっており、やりがいを感じているという。コメに関しては、本来なら収穫は10月頭頃だが、ここでは遅く、10月の中旬以降に収穫する。原発事故が起こって、コメの購入者は減り、新規の顧客を開拓せざるを得なくなった。コメを作りたいという気持ちは強いが、販売先がない状況をどのように考えたらいいのかと頭を悩ませている。そして、政府の助成がなくなったら状況はより厳しくなり、加えて、機械を揃えれば揃えるほど赤字になってしまうという現状がある。土日休まず作業しても赤字であるならば、農業に対するやる気もそがれてしまうのは仕方がなく、現在は農家民泊が主な収入源であると伺った。

13:00～ ① 農家(根本さん)



根本さんのお話



取り組んでいる試験・調査栽培

根本さんから、農業を始めた経緯や震災後の対応についてお話いただいた。根本さんは、昭和30年に県立農学校を卒業し、農作業の手伝いを本格的に始めた。東都生協設立の時に所属する福浦農協と交流があり、生協で取り扱うために、複合汚染が全国的に問題になる3年くらい前から農協で有機農業

をしていた。有機農業は肥料が高く離れていくひとが多く、特栽米をしている人が多かったそうだ。農協では、ゴルフ場建設の反対運動や東北電力の原発建設反対の決議をしていた。野菜についてはいわき生協と取引があって減農薬で作っており、無農薬で作りはじめたのは震災後になってからのこと。いわき生協との取引が終わってからは、自分の分だけ作っており、消費者にサービスで野菜をつけるなどしていたという。

震災後、避難してから最初に農地に来たのは2011年の6月頃で、行政が水路や堰を二次災害がないように管理をしており、特別にそれに同行したと伺った。その後、二本松での大学と協働した農業の取り組みに触発され、平成24年4月に農業を再開したという。2012年には、農協で試験栽培をするという話があり、いち早くそれに手を挙げたそうだ。また、福島有機ネットワークの人が訪れ、国は何もしてくれないからと草刈りをしてくれ、アドバイスをもらい、野菜作りを再開したとのこと。

13:00～ ② 箱崎林業（福島県南相馬市原町区深野入龍田 117-4）



箱崎社長のお話



工場見学の様子

箱崎亮三社長から、震災前の経営体制や震災後の放射能汚染への対応、福島における林業の現状等についてお話いただいた。この周辺では、多くの林業家・会社があったが、震災を機に殆ど辞めてしまったと伺った。震災前、箱崎林業では製紙用のチップを作っており、年間1,300tの規模だったが、リーマンショック後は600tまで減少し、震災が追い打ちをかけたそうだ。震災以降は、木材の放射能汚染や住民の避難によって、材料が入らず、現在は休業しているとのこと。その代わりとして、猪苗代で小規模ながらストーブ用のペレットを生産しているが、同時にストーブが普及しないと売れないため赤字という現状がある。2016年度には、南相馬市が公募した林業再生事業(里山づくり)を受託し、放射線量が低い鹿島区において、里山づくりにも取り組まれている。一方で、仕事の大部分は報告書の作成であり、慣れない仕事で苦労していると仰った。

やはり、林業が一番肌に合っているため、この先も続けていきたいと思いを述べる。今後は、汚染の少ない樹木の内部(樹皮は汚染が顕著)の材料を使用し、チップを作る予定だそうだ。現在、他の材料と混ぜて8,000ベクレル以下を目指し、試行錯誤しているが、まだ条件はクリアできていないという。条件を超えた場合の対応策も不明瞭で、どうしたらいいかわからないといい、また、社員の高齢化が進んでおり、震災の混乱の中で仕事自体辞めていく人も少なくなく、人手不足が深刻化しているとのこと。

12月5日（月）3日目

9:00～10:30 福島県立相馬農業高等学校（福島県南相馬市原町区三島町1丁目65）



高校の外観



教員方のお話

相馬農業高等学校の農業クラブの顧問、造園系の先生、環境再生の教員、福島県の担当課から、当該高校の教育スタイルや震災後の状況、生徒たちの進路についてお話しいただいた。学校としては、生徒を環境教育学会に参加させ、グローバルの視野や6次産業化も含めて、環境と農業について考えさせているようだ。放射能に関する教育は、主に小中学校の方でも行われているが、当該高校でもできる限り取り組んでおり、市の教材使用した授業を実施したり、それに関する雑誌を配っているという。課題研究に関しては、学内で作ったものは放射線量を測らなければならなくなり、現在ではそれを測ることが生活の一部になっていると、複雑な状況を説明された。

震災後は、生徒状況の把握や、新学期や新入生をどうするか等、多くの案件に追われたと伺った。学校ごと相馬市に避難し、当所、相馬女子高校を間借りしていたが、11月に本来の場所に戻ったそうだ。生徒たちの意識は、放射能に関する心配以上に今までの環境を失うことの方に集中していると述べられた。卒業後は、大半の学生は地元で就職するという。高額な所得を望まなければ出稼ぎに出る人はほとんどおらず、上京して大学を出ても就職するようないところがない等の理由であるとのこと。

9:30～10:00 表敬訪問（福島県南相馬市役所）

11:30～13:00 飯館村交流センターふれ愛館（公民館）（飯館村草野字大師堂17）



藤井生涯学習課長のお話



集合写真

藤井一彦生涯学習課長からは、主に飯館村の地域づくりと復興への取り組みについてお話いただいた。飯館村は、震災前から「地域づくり・人づくり」を掲げており、審議会や協議組織を住民主体により行って住民の声を施策に反映させるというような取り組みを進めていた。「やまびこ運動」や「地区別計画」等の成果として、自らの地域を自らが考え創っていく自主自立の気運が生まれたという。

震災が発生し、当初、津波・原発被災者の受け入れを行ったが、その後に高濃度の汚染が発覚し、全村非難となった。地域のつながりは薄れ、築き上げたコミュニティは壊れてしまったようだ。それを受けて、仮設住宅に自治組織を整えたり、広報誌やタブレット端末による情報提供を通じた被災者支援などを行ったと伺った。村では、敬老会やふれあい集会、文化祭等を開催し、コミュニティの再生を図ったという。

現在では、復興に関する意見交換の場が増えていると述べられた。そのような中、安全面に配慮しながら、除染作業やインフラの整備が進行しているようだ。また、地域のネットワークを活用して村に子供を戻す取り組みにも注力しており、2018年度の学校再開を目指しているとのこと。

連絡・問い合わせ先：irunga1205@yahoo.co.jp（東京農工大学大学院修士1年、小松淳一）